
LUCKYSTARS ARE GO !

ソダグァ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LUCKY STARS ARE GO!

【Nコード】

N5928N

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

時は2065年。

人類は既に宇宙にまで進出していた。だが、地球上ではいまだ多くの災害・事故で命が失われていった。人類で初めて月に降り立った男　ただお「トレーシー」はその現状を憂い、私財を投げ打って『国際救助隊』を設立した。ただおの優秀な娘たち（+彼女らの友人）によって構成された隊員は、天才こなたによって設計された『ラッキースターロケット』に乗って地球上のあらゆる場所で起こった重大な危機に対処する。

がんばれ、国際救助隊。行け、ラッキースター！

（前書き）

「らき すた」キャラで「THUNDERBIRDS」を演じると
言うバカネタ。サンダーバード

ストーリーの流れはサンダーバードの第一話を元にしています。
原作が美しい思い出となっている方や、「ファイヤーフラッシュ号
は俺の嫁」など、キャラ・メカに思い入れがある方はこの作品を読
むとそれらが汚されたと感じるかも知れません。また、今のご時世
では“原子力”を夢のエネルギーの様に扱う訳にはいけないので、
前に某画像掲示板であつたやりとりを元に「ロリータエンジン（注）
」を採用しています。最後に、オチが酷いです。それでも構わない。
と思われたなら、貴方の時間をこの作品に少しだけ下さい。

時は2065年。

人類は既に宇宙にまで進出していた。

だが、地球上ではいまだ多くの災害・事故で命が失われている。人類で初めて月に降り立った男　ただお「トレーシーはその現状を憂い、私財を投げ打って『国際救助隊』を設立した。ただあの優秀な娘たち（+彼女らの友人）によって構成された隊員たちは、天才あなたによって設計された『ラッキースターロケット』に乗って地球上のあらゆる場所で起こった重大な危機に対処する。

がんばれ、国際救助隊。行け、ラッキースター！

LUCKY STARS ARE GO！

さいたま国際空港の管制室。

空港長のななこ・キンスンは望遠鏡で滑走路の一点を見ていた。

「ファイヤーフラッシュのお披露目か……」

彼女が望遠鏡を向けている先。そこには国際線ターミナルと繋がった鋭角的なフォルムがあった。新型旅客機ファイヤーフラッシュ号である。今日が一般の乗客を乗せての初のフライトとあって、ロビーには報道陣と思しき姿も見える。

ななこはそのままファイヤーフラッシュ号の全体を舐めるように見舞わず。その時ふと、おかしいことに気付いた。

「まだ整備車両があるな。この時間ならとつくに終わっ取るはずなのに、どしたんやろ？」

ファイヤーフラッシュ号の降着装置のハッチの傍には整備車両が一台停まっている。発進まで残り5分を切っている。もうとつくに機体から離れているはずだった。

「まあ、今日が初めてやからな。念入りに確認しようってんやろ」

いつもなら不審に思うところなのだが、ななこはこう考えて怪しもうとしなかった。これが、大変な事態になるとは知らずに……。

『ファイヤーフラッシュよりさいたまタワー。乗客の確認は終了した。滑走路に向かう』

「さいたまタワー了解」

タラップ車を切り離れたファイヤーフラッシュ号が滑走路へと進んで行く。

滑走路手前で一度停止。滑走路の途中に設置された可動式信号機が赤から青になると、信号機が地面に沈んで行くのとほぼ同時にファイヤーフラッシュ号は走り出した。

離陸。

こうして、腹の中に危険な物が設置されたと知らず、ファイヤーフラッシュ号の飛行は始まった。

×××××××

「なんだか、凄い音がしましたけど……」

ファイヤーフラッシュ号の翼の部分に設けられた客席。
高良みゆきは添乗員と話していた。

「ご安心ください。これは当機が音速を超えたことによって発した衝撃波によるものです。いっさい危険はございませんよ」

先ほど生じた爆音と微妙な揺れ。
みゆきはファイヤーフラッシュが超音速旅客機であると言うことから、ある過程を立てて乗務員に訊ねていたのだ。そして、その仮定は正しかった。

「それを聞いて安心しました」

想像したとおりなんの問題もなく、みゆきは安心して座っていた。

×××××××

『面白い事を教えてやろう。
今出発したファイヤーフラッシュ号に爆弾を仕掛けてある。着陸装置のところだ。
車輪が地面に触ると、爆発する。機体はめちやくちやに飛び散ってしまうぞ』

空港本部に届けられた脅迫電話を録音したテープ。十中八九いたずらだと思ったが、ななこは大事を取った。

「管制官。すぐにファイヤーフラッシュに連絡を！」

ファイヤーフラッシュは既に既定の高度に達していて、自動操縦に切り替わっていた。すぐに機長に低速安全飛行でさいたま空港に引き返すように指示を出す。

「非常警戒態勢に入れ」

同時に空港警察や待機している消防車に連絡を取り、出動の準備を整えてもらう。

と、視界にファイヤーフラッシュの姿が見えてきた。

「望遠カメラの用意と、整備班長を呼んでくれ」

『ファイヤーフラッシュからさいたまタワー。着陸態勢に入る。どうぞ』

「さいたまタワー了解。降着機構辺りのメカニックを確認するので、タワー側から取りやすいように飛んでくれ」

ファイヤーフラッシュが管制室のあるタワーと同じ位の高さで飛んできた。

技術スタッフが即座にカメラの連続シャッター機構のスイッチを入れる。一秒間に数十枚と言う速度でシャッターが押され、写真が撮られていく。

「確認します」

すぐさまカメラがパソコンに接続され、さつき撮った写真の確認に入る。

「ただいま参りました」

整備班長が速やかに管制室にやってきた。

「整備班長。画面に映っているファイヤーフラッシュの着陸機構におかしなものがないか確認してくれ」

何百枚と撮影した写真の中から絞られた20枚ほどを画面上で確認していると、班長は驚きの声を上げた。

「これは……ファイヤーフラッシュの部品じゃない!」

班長が指さす先には胴体部に内蔵された着陸脚、そのフレームの部分に取り付けられた赤い筒だ。

「はくだん Bomb” って、書いてある……」

いくらあやしいものだろうと、異物が取り付けられていたのは確かだ。

「ファイヤーフラッシュへ、こちらさいたまタワー。高度一万メートルでさいたま付近を飛び続けろ」

『了解です。しかしですねえ、ずっと飛び続けると言っても、ロリータエンジンのカバーは2時間30分以内に取り換えないと、乗客が脳を侵されてしまうんですよ!』

機長の言う事はもつともだったが、それ以外に今のところ対策の取りようがない。

ななこは空港幹部を招集した。

×××××××

スペースデブリに覆われた地球の周回軌道上。そこに世界でも一部の者しか知らない宇宙ステーションがあった。

『こちらファイヤーフラッシュ。高度1万メートルで旋回中。ロリコンが脳を侵すまで、あと、2時間。これでは、奇跡でも起こらないかぎり助かりません』

管制塔とファイヤーフラッシュの間の通信。暗号化された電波でやりとりされていたはずのそれが、ここでは普通に流れていた。

何かの組織の制服だろうか？

未来的なデザインの青い服を着た女性が計器の前にいる。

「その奇跡を起こしてあげる」

女性はうつすらと笑みを浮かべた。

×××××××

所変わって、太平洋上にあるトレーシー島。ただお・トレーシーと彼の家族が住む島である。島中央部にあるトレーシー邸ではちょうどただおが音声入力式のタイプライターを使って何か文章を作っていた。

「国際救助隊員はラッキースターロケットの秘密を他に漏らしてはならない。間違って使えば、人類を滅ぼす武器と……」

電子音が鳴った。

ただおは入力を止め、壁に掛けられた彼の娘たちの肖像写真に視線をやる。一番右端の次女まつりの目が光っている。机に設けられたスイッチを押し、スピーカーを展開する。

「なんだね？」

瞬間、まつりの肖像画がモニターに変わり、宇宙ステーションにいるまつり本人が映った。

『おとうさん。私達の初仕事です。ロリータ旅客機ファイヤーフラッシュに爆弾を仕掛けたと言う情報が入りました』

「ファイヤーフラッシュ……みゆきが乗っている飛行機だ」

ただおの娘たちの友人、高良みゆきが乗っている飛行機が確かそれだ。

「みんな、至急指令室に集まってくれ」

館内放送で家族を集める。

広い家だと、いちいち呼びに行くのも骨なのだ。

「どうしたの、おとうさん」

「“司令室”ってことは、初出勤？」

まず、三女のかがみと四女のつかさがやってきた。

「みんなが集まってから話すから、一旦座りなさい」
「はあ〜い」

かがみとつかさはソファに並んで腰を下ろした。

「ちわ〜。整備はバッチシおkです！」

メカニックの天才でかがみたちの友人であるこなた・ブレインズが次に現れた。

「ちょ、こなた。もう少し言葉づかいてもんを……」

かがみがこなたを注意しようとする。しかし、ただおはそれを遮った。

「いや、良いんだかがみ。

ブレインズ、ご苦労。ちょうどいいタイミングだ」

こなたはその頭の回転の速さから言葉が追いつかず、使いなれたネットスラングやオタク用語が出てしまう。今回は締めが敬語っぽかったので、まだマシな方だった。

「遅れてゴメン！」

最後に長女のいのりがやって来て、かがみたちの座るソファの後ろに立った。

「うん。みんな揃ったな。それでは、説明するぞ。さいたま空港発の新型旅客機ファイヤーフラッシュに爆弾が仕掛けられていることが判明した」

と、かがみとつかさの顔が蒼白になる。

「お父さん。ファイヤーフラッシュって、たしか……」

「ああ、みゆきが乗っている飛行機だ」

かがみとつかさは立ち上がろうとしたが、上からいのりによって押えられた。

「ちょっと、お姉ちゃん」

「お父さんの話はまだ終わってないよ？ それにもう少し落ち着きなさい。現場であせったら助かる命も助からなくなっちゃうんだからね」

何かに気付いたように驚くかがみたち。

ただおは話を続けた。

「今回は初出勤にして身内が乗っていると言う事態だ。焦るなよ。仕事の時に着る制服はそれぞれの機に備えてある」

「わかりました」

いのりが、

「よっし。みゆき、待ってなさい」

かがみが、

「みんな、がんばろう！」

つかさが、それぞれ意気込む。

ただおは娘たちの様子を見て微笑む。そして司令を告げた。

「よっしいのり、行きたまえ。かがみは後だ」

壁側に向かって行くいのりと、席を立ったかがみを見送り、ただおはこなたに話しかけた。

「ブレインズ、ラッキースターロケットはお前が作ったものだ。どんな働きをするか楽しみだな」

×××××××

1号の搭乗エリアに入って行きたいのりを見送ると、かがみは司令室の壁に掛けられたロケットの写真パネルに向かう。これは父が乗って月に降り立った時のロケットらしい。

パネルに背中をくつつけるようにもたれかかると、それはかがみの足を上のように持ち上がった。頭を下にする形でかがみの体はパネルから下にあるソリに落ちて行く。ソリはかがみの体の勢い

を受け、そのまま数メートルほど降りた。やがて角度がない回転エリアで横回転することで上下を逆にして、かがみは再び降りて行った。

長い長いスロープを下って行くと、開けた場所が見える。そしてソリが止まり体はその下にあるスロープの最下段に降ちた。

ラッキースター2号のコクピットへの到着である。

かがみにとってここが鬼門だ。めくれあがってしまいそうになるスカートを抑えつつ、足がタラップに着く。ゆっくりとパイロットシートが可動する間に何とか乱れを直し、機体の起動スイッチを入れる。かがみの方にせり出してくる操縦桿。そしてコクピットの床の一部が持ち上がってラックにかけられた制服及び装備類が現れた。

「コンテナは3番を選択。乗せるのは高速エレベーターカーか……」

制服に着替えつつ機体の状態を示すモニターを見る。なんとか本部からのコンテナ選択が終わる前に着替え終え、再びシートに座る。

「着陸脚を下げます」

機体の真下でコンテナの移動が止まったのを確認すると、かがみは伸縮式の着陸脚を縮めるスイッチを入れた。ゆっくりと下降していく機体。

「ロック作動」

完全に地面と同じ高さになったことが計器に示される。かがみは機体とコンテナを接続する電磁式のロックのスイッチを入れた。

目の前では格納庫の扉が徐々に外側に倒れて行く様子が見える。機体を滑走路に進ませる。消化装置を備えた偽装ヤシの木が倒れて行く。

「よし、一時停止……と」

滑走路の途中で機体を停止。すると視界と体が徐々に斜め上を見る形になって行く。発進装置の作動だ。

「ラッキースター2号、発進」

メインエンジンのスイッチを入れる。
空に向かって行く機体。ラッキースター2号の発進だ。

××××××

『ファイヤーフラッシュよりさいたまタワー。救助作業は失敗。怒^ど璃瑠^{りる}2尉はパラシュートで降下。ロリコン汚染まで、あと30分しかありません。どうぞ』

自衛隊に協力を仰いでの爆弾の撤去作業は失敗に終わった。まあ、飛んでいる飛行機の整備ハッチ内に一時的には言え入って爆弾を確認できただけすごいのだが……。

作業の失敗を見越して、管制室ではすでに行動を起こしていた。

「こうなったら最後の手段だ。付近の人は全員避難したから、思い切って着陸させてみよう。胴体着陸してみて、天の助けで爆弾が爆発しないことを祈るしか……」

最後の手段として、ファイヤーフラッシュ号を胴体着陸させることを決めたななこ空港長。

と、その時レーダーを見ていた管制官が慌てた様子で報告してきた。

「東から飛行体が接近。高度825メートル。速度、あの……時速何と12000キロです！」

赤い髪の下（確か、マクドウガルとか言う名前）の報告に呆れるななこ。

「時速12000キロだと！？ 気でも狂ったのか」

極度の緊張で部下の精神がまいってしまったのだろう。

「こちらラッキースター1号よりさいたまタワー。現在空港に接近中。高度、825メートル。速度時速12000キロ。後2分で着陸します」

無線機からの声を聞き、ななこはレーダーの下に向かう。自分の気も狂ったと思った。

「さいたまタワー。こちら国際救助隊。ファイヤーフラッシュ号の救助の手伝いに来ました。着陸許可を求めます」

「国際救助隊？ 聞いたことがないな。」

国際救助隊へ。着陸許可を出す。滑走路は、29番」

国際救助隊だとか、聞き覚えがない名前だ。胡散臭いとはおもいながらも、しかし今は藁にもすがりたい。着陸許可を出す。

『あ、滑走路はいりません。垂直着陸しますんで』

××××××

ラッキースター1号に続く形で発進した2号。かがみはその操縦桿を握り、先行した姉いのりからの連絡を今か今かと待ちわびていた。

『ラッキースター2号、こちら移動司令室。さいたま到着まであと何分何秒？』

姉の質問に計器とナビゲーション見て、暗算で答える。

「OKお姉ちゃん。あと19分30秒で着く」

『了解。着いたらすぐに高速エレベーターカーを3台用意して。29番滑走路の端に運んだら、知らせて』

どうやら空港当局の協力を 無事に得られたらしい。

「ラッキースター2号、了解」

そうこうしている内に、空港が見えてきた。

「ええっと、29番は……あつた」

指定された滑走路に2号を垂直着陸させると、かがみはコンテナ内部に移動した。予備を含めた4台の高速エレベーターカーがそこに積み重ねていた。かがみはコンテナ内部にあるハッチの開閉スイッチを入れる。

外では2号がコンテナとの電磁ロックを外し、伸縮式の着陸脚を伸ばしているところだろう。今の内に『MASTER ELEVATOR CAR』と書かれた一台に乗り込む。

ハッチが開いた。スロープを兼ねたハッチの上に車体を進ませる。まずは自分の、そして2台の無線誘導車両オフシヨが出ていく。

滑走路上で三角形を描くように3台を並ばせると、姉からの連絡がきた。

『移動司令室からラッキースター2号。用意はいいか?』

「移動司令室とファイヤーフラッシュ。こちらラッキースター2号。準備完了」

『司令室よりラッキースター2号、了解』

通信機からは姉の声以外に焦る声や、怒号が聞こえてくる。管制室はきつと緊張した雰囲気包まれているのだろう。

『いい、かがみ。いよいよファイヤーフラッシュが入って来るわよ。現在2キロに接近……1.5キロ……1キロ……作業開始!』

「こちら2号、了解」

こちらからはファイヤーフラッシュ号の様子をうかがう事が出来ない。姉のアナウンスに従い、エレベーターカーを発進させた。

『108に増速』

「了解」

後方モニターにファイヤーフラッシュ号の姿が見えてきた。
あつという間に追いつかれる。

かがみは自分の乗る1号車を胴体の、2号と3号車を左右の翼の下に誘導した。

「ファイヤーフラッシュ。エンジン停止」

エンジンを切ったファイヤーフラッシュ号がエレベーターカーの上に降りてくる。

衝撃。

1号と2号は上手く行っただが、左翼を担当する3号に上手く乗らない。

「ファイヤーフラッシュ、左を上げて！ 左翼を上げるの！」

ファイヤーフラッシュ号が再びエンジンに火を入れ、左翼を持ち上げる。

3号車の速度を上げ、2回目で上手く乗った。

「よし、逆噴射開始」

ファイヤーフラッシュ号は逆噴射用のエンジンを点火。

「こっちもブレーキをかける」

ゴムが路面で削れる凄まじい音。同時に車内も熱されて辛い。

『このままではダメだ！ 滑走路から飛び出してしまあう！』

ファイヤーフラッシュ号から警告。メーターを見ると減速はでき

ているようだが、まだ足りないらしい。

「落ち着いて。全制動をかける」

ブレーキから一転、ギアをRに入れて制動をかける。凄まじい負荷に車体が悲鳴を上げている。

バースト
破裂音。

自分の乗っている車の制御が効かなくなってしまった。なんとか停止させようとするが上手く行かず、ファイヤーフラッシュ号の下から弾かれてしまった。

「こんのおっ！」

最後のあがきで滑走路に叩きつけられた機首に車体をぶつけ、進行方向を変えてやる。その反動で1号車は完全に滑走路から外れてしまう。

「うわぁっ！」

上下が入れ替わる。

ファイヤーフラッシュは、みゆきはどうなったの！
モニターが割れてしまい、状況が分からなくなる。

『大丈夫、かがみ？』

移動司令室の姉からの連絡。

「こっちは大丈夫。ファイヤーフラッシュは？」
『もう大丈夫よ。今空港の消防隊が向かった』

消防車や救急車のサイレンの音が聞こえてくる。

ああ、よかった。

かがみはほっと、胸を撫で下ろして上下逆の現状からの脱出を図ることにした。

左腕で頭を抱えるようにしながら、シートベルトを外す。

「あいたたたた………」

天井に落ちる。

一瞬痛みが走るが、それよりも安堵が大きかった。

×××××××

「……と、言う夢を見たんだよ」

休日の柊家の食卓。寝坊した末女のつかさは言った。

いきなり何いってるんだ、この子は。

つかさのすぐ上の姉である3女のががみは呆れながら、昨日の事を思い出して言った。

「昨日テレビで映画を見たから？」

実は昨日、地上波で「THUNDERBIRDS ARE

GO!」が放映されていたのを、家族で見っていたのだ。

「たぶんそう」

つかさの返事に、かがみは溜息を吐いた。

終わり

（後書き）

らき すたで何かSSを書こうと考えていたら、ふと思いついたネタ。

「作者は何歳だ？」そう思う方がいると考えて先に言っておきますが、平成BOYです。92年に放映された再放送を親が録画しておいてくれた物を、何度も見て好きになったクチです。

さて、内容はTHUNDERBIRDSの一話を改悪してらきすたキャラを突っ込んだものです。柊家をそのままトレーシーファミリーにあてはめたのですが、いつそ「かがージル」とか、「つかドン」などの名前にしようか迷った末、妥協して今の形になりました。「ただエフ」なんて、発音できませんしね。こなた「ブレインズなのは、頭の回転が速すぎて言葉が追いつかなくて吃音」と言う設定をみゆきでは使い難いと思つてのものです。

さて、私が受けとった電波によるこの小説を読むのに時間を使っていただき、ありがとうございました。私の芸風がお気に召しましたら、どうか次の作品もよろしく願います。

（注）ロリータエンジンは「萌え連」であつたやり取りで上がった物を使っています。ログが一度落ちてしまったので詳しい日時は分かりませんが、私のアイデアではないので、原文とともにここに書いておきます。もしあのやり取りをしていた方が読んでいたなら、ここでお礼を言わせてもらいます。ありがとうございました。

「ロリータエンジン：ロリを原動力としてエネルギーを生み出す機関。

俺達、もしくはお前らが単一、または複数搭載されている場合がある。（気筒数は人数構成）

原動力のロリは2次元と3次元の場合がある。場合によっては両方の使用が可能であるが、基本的にはどちらか一方に対応する正しい

燃料を使用しなければ趣向の違いによる反^{ノッキング}発が発生し、燃費や性能の低下に繋がる。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928n/>

LUCKYSTARS ARE GO !

2010年10月13日07時21分発行